3.11 伝承・減災プロジェクト

3.11 東日本大震災伝承板 －長浜海岸防潮堤－

平成23年3月11日に発生した巨大地震は、三陸沖を震源とするマグニチュード9.0という我が国の観測史上最大規模となり、県内で震度7から震度6強の非常に強い揺れを観測しました。その後、三陸沿岸で高さ30m、仙台湾沿岸でも高さ10mを超える大津波が発生し、県内では、1万人を超える尊い人命が奪われ、県土及び県民の財産に甚大な被害をもたらしました。私たちは、あの日起きた出来事が、「いつかどこかであったこと」ではなく「いつでも起こりうること」であると、それぞれの胸にしっかりと刻み、出来るかぎりの備えを講じていかなければなりません。

宮城県土木部では、この震災の経験を風化させることのないよう後世に「ながく」伝承していくこと、また、今後発生しうる災害などに対する迅速な避難行動の啓発を目的としてこの伝承板を県内の各海岸に設置しています。

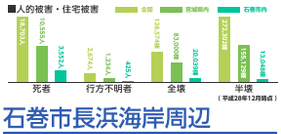
東日本大震災

平成23年3月11日14時46分頃に発生した「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震」では、東北から北関東の広範囲で強い揺れを観測し、北海道から沖縄県にかけての太平洋沿岸を中心に非常に大きな津波が発生しました。県内での最大浸水高は、南三陸町(志津川)で T.P.+19.6m、最大遡上高は、女川町で T.P.+34.7mに達し、沿岸地域に壊滅的な被害をもたらしました。この震災は、明治以降では関東大震災(大正12年)、明治三陸地震津波(明治29年)に次ぐ極めて深刻な被害となり、政府はこの地震による震災の名称を「東日本大震災」としました。

被害状況

この津波による浸水面積は、県では全体の4.5%にあたる327km²(国土地理院概略値)、 石巻市では平野部の約30%にあたる、中心市街地を含む沿岸域の約73km²にもおよびました。これにより多くの人的被害が発生したほか、沿岸の構造物や家屋の破壊・流出、農業、漁業、製造業などの基盤産業の喪失、道路や鉄道などの交通網の分断など想像を絶する甚大な被害となりました。

■人的被害・住宅被害



石巻市長浜海岸周辺

石巻市は、人口約16万人(平成22年国勢調査)を有する県下第2の都市で、その中で湊地区から渡波地区、万石浦地区一帯は、古くから水産業を中心とする活気ある地域であり、背後には多くの住宅が張り付いていました。東日本大震災による被害を受けて、県と市では、漁港や道路の復旧と併せ、住宅の内陸移転、防潮堤、高盛土道路、防災緑地・防潮林、津波避難タワー・ビルの建設など、災害に強いまちづくりを進めています。

長浜海岸防潮堤は、石巻湾に面した遠浅の美しい砂浜で賑わいを見せていた海水浴場の再生と、今後起こりうる津波や高潮から生命や財産を守るために、新たな津波対策として高さT.P.+7.2m、延長970mで建設されています。

■長浜海岸防潮堤被災状況

■渡波中学校周辺被災状況

■震災前

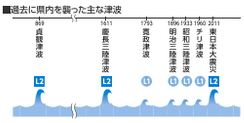
■震災後

■復興まちづくり計画

海岸で大きな揺れを感じたら、速やかに避難しましょう。

新たな津波対策

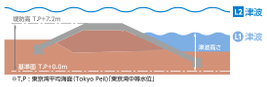
■過去に県内を襲った主な津波



L1 津波対策

L1津波とは、明治三陸地震津波やチリ地震津波などの数十年から百数十年に一度程度の被害を及ぼす津波のことを言い、この津波に対しては、海岸防潮堤により市街地等を防御します。

■長浜海岸防潮堤(イメージ図)



L2 津波対策

L2津波とは、貞観地震津波や東日本大震災などの最大クラスの津波のことを言います。この津波に対する完全防御は困難であるため、避難を前提として、高盛土道路や防潮林などの津波防御施設、内陸移転や避難ビルなどのまちづくり、避難路やハザードマップなどの避難体制の整備により、三位一体となった多重型津波防災対策を図ります。

避難体制 ＋ まちづくり ＋ 防御施設

まずにげよう
たいせつなのは
そのいのち

出典 ： 平成28年度石巻市学校防災「合言葉」 最優秀作品より